

風と熱を

塩ボウズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつも通りに屋上で野菜の収穫をしていた千紗と台本を読んでいたまほろのお話。

目次

風と熱を

「ふーっ！今日もよく取れたわね。これでなに作ろうかしら。」

私は赤川千紗。AIRBLUE所属の新人声優。

私は屋上で野菜を育てて、料理の材料を自分で仕入れたりしてます。

そして、私のほかに育てるのを、協力してくれる人がいます。

まあ、協力というか読み上げてるだけなんだけど…。

「なんで!!なぜ私の言うことが聞けないの MARIA!!」

彼女は宮路まほろ。私と同じAIRBLUE所属の声優。元子役で、誰よりも努力家な性格をしています。

「あら、次のオーディションの練習?」

「そう。でも、ちよつとここが難しくてね…。」

まほろの持つ台本に手をやると、そこにはマーカーやメモ書きなど彼女なりの努力が表れていた。

感情の起伏が激しいところには波線が引いてあったり、苦手なところには赤ペンで書いてあったり、彼女の努力が一目でわかるものだった。

私も声優としても負けられない気持ちで心の中で感じていた。

私は収穫した野菜を袋に入れ、両手に袋を持ち寮のキッチンへと移ろうとしていた。

「それ、手伝おうか?」

まほろは野菜がいっぱい入った袋を指さす。

断ろうとしたが、重いのは事実。

「うん、お願い。ありがとう。」

「これくらい大丈夫だよ。私もここ使わせてもらってるわけだし。」
片手に持っていた袋を渡し、一緒に階段を下りていく。

☆☆☆

キッチンに着き、料理の準備をする。

髪を結び、手を洗う。野菜を袋から取り出し、包丁を取り出す。

左手は猫の手で、丁寧に――

「痛っ…！」

包丁を音が鳴り響く。

まほろが「大丈夫!？」と駆け寄ってくる。

「うん…大丈夫。だけど、指を少し切っちゃったみたいで…。」

「ちよつと待ってて！」

傷口を洗っていると、まほろが絆創膏を持ってきてくれた。

「まさか千紗が料理で指切っちゃうなんてね…。」

「私でもそんなことあるよ。まほろだって演技で間違えることあるでしょう。」

私がそう言うともまほろは静かにうなづく。

すると、しばらくまほろは考える素振りをする。

「そうだ！」とまほろはいきなり声を出す。

「今日はまほろが料理作ってあげるよ。千紗には無理させるわけにはいかないし…。」

「で、でも大丈夫。私も作るから。」

「無理しないで。こういうときに助け合うもんでしょ？」

私はまほろの言うとおりに、料理をまほろに任した。

ソファに腰を掛け、まほろの方を眺める。

まほろつてなに作れるんだろ…。そんなことを考えつつ、体を休めていた。

最近、声優の仕事がうまくいってなかったからかな…。疲れてるのかも。

んっ…。眠くなってきたかも…。

――あ、あれ。私…。寝ちゃってた？

「あ、やっと起きた。ほら、冷める前に食べて。まほろ特製のご飯だから。」

「あ、ありがとうまほろ。私の代わりに作ってくれて…。ってこれって――」

ラーメン？それに、光ってる…。

「これ？前にまほろと舞花の二人で作った光るラーメンだよ。」

「なに作ってんのよ!!やっぱ私が作るべきだったのかしら…。」

そう言いつつ、この輝くラーメンを口に運んでいく。

箸でつまんだ麺を口で啜る。

「…おいしい。」

「よかった。まほろ、千紗ほど料理うまくないからさ。」

「まあ、見た目はともかく、作ってくれてありがとう。まほろ。」